

# 富山市の中世集落(5) 金屋南遺跡

金屋南遺跡は、井田川の西岸の自然堤防上に立地する、平安時代から室町時代を主体とした大規模な集落跡です。

この集落では、鎌倉時代には在地領主層が住居を構え、室町時代には鋳物師(鋳物づくりの職人)が暮らしていました。

## ◆鎌倉時代(12世紀～14世紀前半)

遺跡の北東に居住域と墓域が、溝で区画されて計画的に配置されていました。

居住域には 23 棟の掘立柱建物が整然と並び、在地領主層の住居と考えられる 100 m<sup>2</sup>を越える大型総柱建物(1間ごとに格子状に柱を立てた建物)も 3 棟見つかっています。

## ◆室町時代(14世紀後半～16世紀)

### (1)鋳物づくりの村へ

最盛期を迎えた集落は、遺跡の中央から南に営まれました。東側の川べりでは 14 世紀後半から 15 世紀後半頃まで鋳物生産が大規模に行われました。

南東部では掘立柱建物 32 棟や井戸が集中し、大型の建物(50～80 m<sup>2</sup>)は鋳物師が暮らした住居、小型の建物(2～30 m<sup>2</sup>)は工房や収納施設と考えられます。

また、村のはずれには共同墓地(土壌墓群)があり、その一角に火葬場がありました。墓には刀子が副葬されたものもありました。

### (2)続々と見つかった鋳造関連の遺構・遺物

**遺構** 鉄・銅を溶かす溶解炉 1 基(写真 1)や鋳造土坑(鋳型を設置した穴) 2 基があります。斜面下側には、いらなくなった炉壁や鋳型、鉄滓(鉄を溶かした時の不純物)、焼土、炭など総重量 6.3 t が捨てられました(写真 2)。

**遺物** 出土品には、炉壁や鋳型、羽口(鞆から炉への送風口)、取瓶(溶けた金属をすくう容器)、湯口栓(鋳型の金属注入口の栓)、

鉄滓・銅滓、銹鉄(溶けた金属が飛散して固まったもの)、炉等の補強材、鉄鍋などがあります。鋳型からは、日用品の鉄鍋のほか、熟練した鋳造技術が必要とされる梵鐘や仏具(香炉等の獣脚、磬または風鐸の舌)も生産されていたことが分かります。

※磬は板状の打楽器。風鐸は堂塔の軒につり下げる鐘形の鈴。

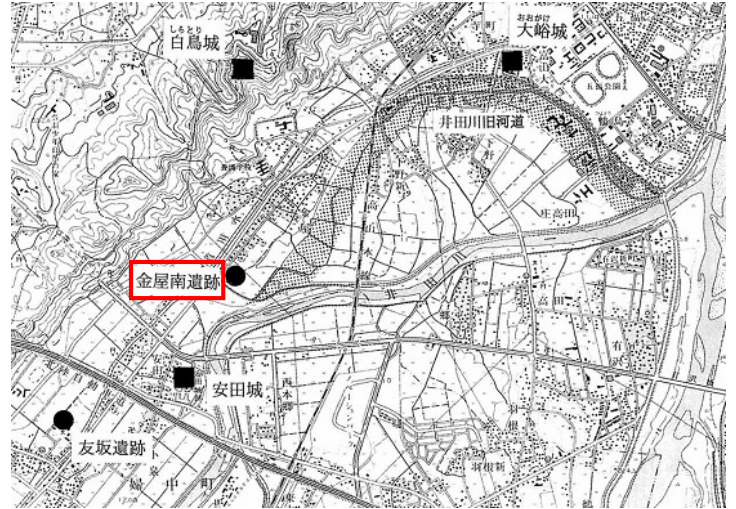


図 1 金屋南遺跡の位置

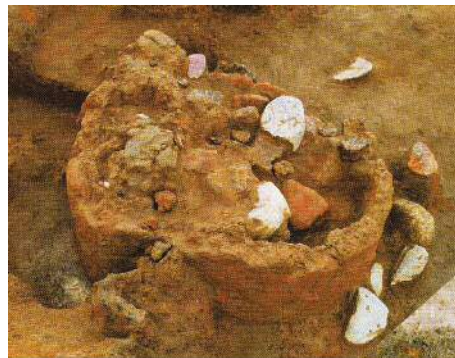


写真 1 溶解炉の検出状況



写真 2 捨てられた鉄鍋の鋳型

川べりでは、鏡と太刀の飾り金具が納められた提子（酒を注ぐ容器）が見つかりました（写真3）。提子は直径19cm、高さ8cmで、釣手には三連の花菱亀甲文などの文様が彫られています。また鏡は秋草や鳥の文様が描かれている優品です。これらは全て京都産の銅製品ですが、どれも破損しており、錆つぶしてリサイクル材として再利用するために収集されたようです。



写真3 提子出土状況

### (3)水神への祈り

**あまご 雨乞いの儀式か？** 大溝から馬の歯が出土しました（写真4）。臼歯が咬みあった状態だったことから、胴体から切り落とした馬の頭部を溝の底に置いたと考えられます。牛馬を殺して水神に捧げたり、水をわざと汚して水神に洗い流させようとする雨乞い儀式は、近世まで続いており、そうした儀式の可能性がります。



写真4 馬歯出土状況

**さいし 井戸の祭祀** 井戸の石組に漆椀が逆さまにして埋め込まれていました（図2）。同様の事例は市内の中名V遺跡などでも確認されています。古来より井戸には神が宿るとされており、井戸構築の際、湧き水の安定や水の清めを祈願して、祭祀が行われたと考えられます。

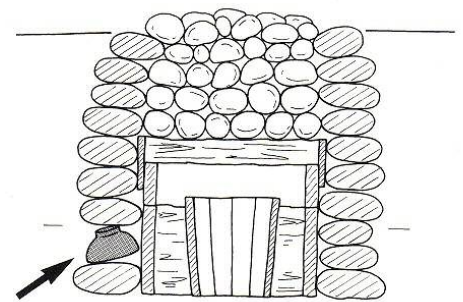


図2 漆椀出土状況模式図

### ◆まとめ ～鑄物生産の背景と「金屋」の地名～

井田川沿いの呉羽丘陵麓に立地するこの地は、船で地金や製品を運搬したり、丘陵から良質の粘土や燃料にする木炭を調達したり、川から作業に必要な水や砂を得るのに便利な環境でした。

室町時代にこの一帯は、京都醍醐寺三宝院が所有する御服荘でした。「御服金屋」とも呼ばれたこの地の鑄物生産には、荘園経営にも関わった守護や守護代などの有力者の関与が推測されます。京都産の銅製品はこうした有力者が入手したものと考えられます。

また近くには、武家の保護のもとで繁栄した臨濟宗の崇聖寺（鎌倉時代末～戦国期か）があり、寺に必要な梵鐘や仏具をこの遺跡で製作したと考えられます。

戦国期になるとこの地は、越後の上杉氏と射水・婦負郡守護代の神保氏が対立した「金屋村の戦い」などの戦場となり、金屋南遺跡の集落は衰退していきました。

各地に残る「金屋」の地名の多くは、かつて鑄物師が集住して金物を生産したことに由来します。金屋南遺跡がある土地の地名も、室町時代に鑄物づくりの村があったことの名残といえます。

**おもな参考文献** 富山市教育委員会『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』1999・2003・2006・2007年  
富山市日本海文化研究所『富山市日本海文化研究所報』第38～40号 2007・2008年